第17回

竜山石、東京の博覧会に出品

今回は、中筋の船津家文書の中から竜山石が、明治23年（1890）、東京で開かれた「第3回内国勧業博覧会」に出品する様子を紹介します。

この博覧会は、内務卿大久保利通が積極的な近代化政策をすすめ、勧業政策の一環として博覧会を提唱し、明治10年（1877）に第1回を開催しました。（入場者45万人を超える）

第3回は明治23年4月から4カ月間、花の上野公園で開催され、会場内を電車が走り、自転車がデモンストレーションをしたといわれています。

これに先立つ前年の『博覧会出品願』によると、明治22年6月14日付で、中筋村の船津吉太郎は、兵庫県知事内海忠勝宛に「第三回内国勧業博覧会へ、前記の部、別紙目録の通り出品仕り度くこの段願い奉り候也」と博覧会への出品を願い出ました。

別紙の目録を見ますと、銘柄を色調から、青石、白石、赤石の三種類に分類、いずれも長さ1尺、竪5寸、厚さ4寸の容積で1個ずつ出品しています。売価については青石が最も高く、白石と赤石は同価格で、青石は高級品として紹介されたようです。出展品の製造人は、青石は生石村の野々村八郎、白石は中筋村の山本清七、赤石は塩市村の大谷万平と記されていて、良質な製品を産出する当時の山方をうかがうことができます。竜山では、今でも青・白（黄）・赤の3色の石が取れます。

博覧会は産業や技芸の発展に主眼が置かれ、出品物については後々に価値が出るもの、継続的に商売になるもの、技を極めたものを出品するよう要求されました。出品のお礼として、主催者側の大日本農会幹事長の宮島信吉から船津吉太郎宛てに『建築石寄付の謝状』が贈られています。

会場での様子の詳細はわかっていませんが、千数百年の採石の歴史を有し、全国に名高い竜山石の展示に多くの人が目を留める様子が想像できます。当時「印南郡の重要物産」と位置付けていた竜山石にとって、政府の一大イベントの大博覧会への出品は大きな弾みになったといえるでしょう。

（高砂古文書の会
歌井　昭夫）

文化財総合的把握モデル事業
ひと・まち・石
問合先　教育委員会
生涯学習課文化財係
☎448－8255

博覧会出品感謝状（船津家文書）